

ガ^ンで逝^はつた夫婦の愛の軌跡 山本八重子著

ありがと^う純子



ありがとう純子

定価 980円

1983年4月30日発行

1983年5月20日4刷

著者	山本八重子
印刷	いのちのことば社印刷部
発行所	いのちのことば社

160 東京都新宿区信濃町6

乱丁落丁はお取り替えます

Printed in Japan © 山本八重子 1983

ISBN4-264-00603-1

ありがとう純子

ガンで逝った
夫婦の愛の軌跡

山本八重子著

序 文

三 浦 綾 子

山本八重子さんから初めてお便りをいただいたのは、昨年（一九八二年）一月末のことであつた。

「……私四十八歳になる主婦でございます。私の娘夫婦が同時に癌に侵され、一か月ちがいで共に天に召されました。その病氣との戦いを通して、二人がいかに愛し合い、信仰をもつて天に凱旋したか、その記録を綴ってみました」

という手紙であつた。その手紙には、山本さんの所属教会の小平牧師の懇切な手紙も添えられてあつた。

つづいて二百三十枚からの原稿が送られてきた。ちょうど長篇小説「青い棘」の連載が終つた時でもあり、私は珍しく早く目を通すことが出来た。

一読、まことに重い内容の記録であつた。それはヨブの苦難に匹敵する苦しみとも言えた。若

い夫婦が共に癌を病み、愛する幼な児一人を残し、ついに次々と天に召されて行つたのである。ヨブはまだ、癒された余生があつた。財産も子供も恵まれた余生があつた。だがこの二人は死んで行つた。その点、ヨブにもまさる試練を受けたと言つてもよい。

だが、そんな過酷な二人の病床に、キリストの光が照らされていた。著者の山本さんも、同じその光に立つて、涙を払つて書いておられる。苦しみの中で神を讀^{よみ}えつつ生きる姿、死に臨んで、従順に己が生を生きる姿、そのような姿ほど私たちに深い感動を与えるものがあるであろうか。

これを読んだ私は、小説の形でではなく、あくまでも手記として書かれることをお勧めした。山本さんはその私のアドバイスを謙遜に、素直に受けとめてくださり、忘れていた頃に、三百枚を越える原稿を、再び私のもとに送つてこられた。昨年新秋の頃であつた。

が、私はその原稿に、すぐに目を通すことは出来なかつた。私ごとながら、五月に直腸癌の手術を受け、体調を崩して辛い日々を送つていた。というわけで、これを読み終つたのは、年が明けてからであつた。

私は再び山本さんの原稿を読み、前より一層強く心を揺すぶられた。私自身、癌の手術を受け、癌患者としての療養生活を経ていたからである。それにしてもまだ若いこの夫婦が、よくもここまで確かな信仰を得、この過酷な人生を自分の人生として、素直に感謝することが出来たも

のと、幾度胸を突かれたことであろう。また周囲の人々の美しい友情と信仰も稀に見るものであり、この二人のために連鎖断食を四十日つづけ、かつ祈り、明らかに奇蹟と言える苦しみのない召天を見るのであるが、そのくだりには、特に心打たれずにはいられなかった。

二人の信仰の証しを、いちいちここに引用する紙数はないが、癌という恐ろしい病気を、神からの賜物として受け入れようとする時、既にそこに信仰の勝利が約束されていることを、私は幾度も思ったことであつた。私もまた浅い信仰ながら、あの手術の前後に、この世のものならぬ平安を与えられたことを再び思い返し、この書の真実を新たに確認したのである。

肉体の命とは何か、苦難とは何か、人はこの書を通して、改めて考えさせられるにちがいない。また信仰とは何か、永遠の命とは何かを、教えられるにちがいない。そしてこの若き夫婦が、苦難の床の中で得た神の恵みが、約束が、いかに確かなものであり、想像を越えたものであるかを知るにちがいない。

遺児守ちゃんの上に、著者山本さんの上に、遺族の方々の上に、教会の方々及び、お二人にかわつたすべての方々の上に、天来の慰めと励ましを心より祈り上げつつ、拙ないペンを置くものである。

目次

序文（三浦綾子）

序章 9

天国の娘へ 11

死刑の宣告 12

私の宝 14

恋の成就 21

純子の手記	28
手術	41
守の誕生	56
純子入院	64
退院	85
洗 礼	93
断 食	106
伸行入院	117
残された日々	129
奇 蹟	143
天国への旅立ち	167

二人だけの告別式 175

先生、体を大切にして下さい

186

永遠の結びつき 195

思いは遠く娘のもとへ 199

終章 204

あとがき（小平照夫）

序 章

私は今、桜の花を見るのがつらい

桜の花が大好きで

いつも短い春を追いかけて、花の名所を一緒に歩いた娘

桜の咲く四月に生まれ

同じ桜の四月に結婚とつぎ

桜の咲く四月に、わずか二十五歳の若さでその花のように

アツという間に散って逝いった娘を

思い出させる桜！

私は今、その花を見るのがつらい

だが、そんな私の心を知らぬげに

今年もまた、花は爛漫らんまんと咲き誇っている

自分の命とも思つて愛した娘夫婦が、共にガンで倒れた。結婚してわずか二年。幸せの絶頂で、一か月違いで召天した。これは、その時の夫婦の愛と、家族の壮烈な戦いの記録である。

一人娘、純子、二十五歳。

その夫、伸行、三十二歳。

あまりにも若すぎた最愛の子供の死に直面して、うろたえ、嘆き、そして悲しみ、生きる希望を失った時、神は私に生きること命ぜられた。二人が残っていた愛の結晶、幼い生命を私に託されたからである。

天国の娘へ

純子。あなたが母さんをおいて天国に逝^いってから、二十五年のタイムトンネルをくぐったように小さくなったあなた！ あなたの形見の守ちゃんが母さんの生きる支えになっています。

今までさわったこともなかったあなたの机を整理して、日記や書きかけの手記を見つけ、母さんは貴女の愛の深さに感謝をし、泣いてしまいました。「お母ちゃん、しっかりして！」と言うあなたの声が聞こえて来るようです。

あなたは生まれた時から、母さんの子供としてはできすぎていましたね。母さんはすばらしかったあなたを忘れないために、そして、あまりに短かったけれど濃縮されたように中身の濃かったあなたの人生を、守のためにもここに書き残してみたいと思います。「あまりばかなことは書かないで！」と叱られそうだけど、許してね。

死刑の宣告

一九八〇年（昭和五十五）十月十四日。その日は秋雨の降る肌寒い日であった。杉山放射線科の待合室は混んでいて、比較的元氣そうな患者が時間を持てあますように待っていた。

午前中に検査を終えた娘を入院先の大手前病院まで送り返し、結果を聞くために、私は再び先生の前に座った。がっしりとした眼鏡をかけた先生が、レントゲン写真を広げながら「患者さんのお母さんですね」、そう念を押すように聞いて、私の顔をじつと見つめた時、一瞬、私は息の止まるのを覚えた。

「ハイ」

そう答えるのが精いっぱいであった。

「うーん」とうなりながら写真に目を移した先生の口もとを、息をつめたまま見入っ

ている私の耳に、あの残酷な言葉が飛び込んでこようとは夢にも思わなかった。

「お嬢さんはガンです。それも恐らく、手遅れでしょう」

先生は、そう一気に言われた。その時、目の前がスーッと暗くなつて、何かを考えようとしても、私の頭の中はからっぽになり、自分で自分がわからなくなつた。

「先生、何とかありませんか。私、何でもします。何とかして下さい」

何を言っているのかわからない。先生も看護婦さんも待合室の人たちも、感覚の中から消えた。私は声を放つて泣いた。そして、なぜこうなるまで気づかなかつたのかと、気も狂わんばかりに自分を責めた。

さっきまで降っていた雨があがつていた。どのようにして病院を出て来たのか覚えていなかった。先生に渡された娘のレントゲン写真をしっかりと抱いて、たそがれていく街をただ夢遊病者のように歩いていった。

幸せと不幸とは、こんなに背中合わせにあるものなのか。きのうまであんなに希望に燃えていたわが家に、こんなに大きな不幸が待っているなんて、だれが想像しえたであらう。

私の宝

一九五六年（昭和三十一年）四月十二日。純子は私たち夫婦の初めての子供として生まれた。その日、桜の花は満開を過ぎ、はらはらと花びらが舞っていた。

難産で破水が先に起き、羊水のなくなつたおなかに赤ちゃんは取り残された。

「このままでは母体が危険です。赤ちゃんを殺して、母体を助けましょう。時間がかかりすぎています」

「赤ちゃんを殺すって、どういうことですか」

「赤ちゃんは羊水と一緒に生まれ出て来ます。それが早期破水によって、カラ子になつています。このままでは生まれません。赤ちゃんの頭を突いて小さくすれば、出るはずですよ」

「先生！ そんな、この子を殺すことは私にはできません。別に方法はないのですか。」

私は死んでもかまいません。先生、助けて下さい」

先生の口から帝王切開という言葉が出た。私はすかさず答えた。

「帝王切開して下さい。私のおなかを切って赤ちゃんが助かるなら何でもして下さい」
こうして純子は、この世に元気な産声をあげた。丸々と太ったかわいい赤ちゃんだった。切腹をして身動きのできない私のお乳に、祖母に抱かれて、うつ伏せになって力強く吸いついていた。

お産は大変であつたが、その後は病氣一つせず楽に育ってくれた。「帝王切開で生まれた子は脳に圧迫を与えないから賢いのですよ」と先生に言われて、ほんとうにそう思つてしまうほど、純子は頭の回転がよかつた。

純子が六歳の時、私は二人目の子供を産んだ。だが死産であつた。帝王切開の時の傷がもとで赤ちゃんは窒息したのである。赤ちゃんができると言つて、純子ははしゃいでいた。名前まで決めて待ち望んでいたのに、みんなは悲しみに沈んだ。純子は、その小さい妹（のり子）の遺体にすがつて泣いたそうだ。そのいたけな姿を見て、主人は一人隠れて泣いたとあとで聞かされた。私は大きな失意の中で、純子のためにしつかりしなければと悲しみを耐えたのを覚えてゐる。